様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 ２７ 日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ１３１５０

研究課題名（和文）青年期の基本的医療関連知識の評価尺度開発と教育効果の検討及びヘルスリテラシー調査

研究課題名（英文）Scale development for medicine-associated knowledge for adolescence and health literacy evaluation

研究代表者
春原　光宏（Sunohara, Mitsuhiro）

東京大学・保健・健康推進本部・講師

研究者番号：００６３７６９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：高校の「保健」の指導要綱・教科書をもとに、大学生の健康に携わる医師・保健師からのエキスパートオピニオンを加えて、青年期の基本的医療関連知識評価尺度のパイロット版を作成した。584人から回答を得、因子分析の結果、「喫煙と咳」、「多様性の理解」、「日常生活の安全」、「疾病の知識」、「規則の理解」の５カテゴリーに分類された。疾病の知識」と総得点は、医学部・薬学部学生が他学部学生よりも有意に高得点であり、既知集団妥当性が示された。また、我々の定義した基本的医療関連知識評価尺度は、教科として学ばれる意図的学習だけでなく、日常生活やメディアから学ぶ偶発的学習の寄与が大きいことが示唆された。

研究成果の学術的意義や社会的意義
大学生への基本的医療関連知識についてのアンケート調査を通じて、大学生がどのような項目についての知識が不足しがちであるかが明らかになった。喫煙やアルコールについては正しい知識を持っている学生が多かったものの、ワクチンのように誤解されやすい情報が多数ある分野や、自殺・避妊のように高校生の日常生活で話題にのぼりにくい分野の正答率は低かった。高校の保健教育や、大学生への健康教育の際に、このような分野にフォーカスして意図的学習を行うことが基本的医療関連知識の底上げに有効である可能性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：Based on high school "health" subject, we create a pilot version of Medicine-Associated Knowledge Evaluation Scale for Adolescence(MAKES-A) through an expert opinion method from doctors and nurses who works for university students. 439 answers were collecte and as a result of factor analysis, they were classified into five categories: "Smoking and coughing", " Understanding of diversity", "Safety in daily life", "Knowledge of diseases", and "Understanding of rules". . "Knowledge of disease" and the total score were significantly higher among medical and pharmacy students, demonstrating known group validity. In addition, it was suggested that incidental learning learned from daily life and the media, contributed greatly to the MAKES-A.

研究分野：メディカルリテラシー

キーワード：メディカルリテラシー　大学生　青年期　保健　高等教育

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

大学保健センターにおいて診療を行っている研究代表者は、喫煙・飲酒・性行為（避妊・性感染症）・医療制度など、大学生の基本的医療関連知識の底上げの必要性を痛感している。また、近年基本的な健康情報を調べ、理解し、評価し、活用する能力であるヘルスリテラシー（health literacy）の重要度が増加している。

すでに複数のヘルスリテラシー尺度が開発されており、妥当性の検討も済んだ日本語版も開発されているが、残念ながら我が国の成績は欧米・アジア各国より劣っている。また、喫煙・飲酒・性行為（避妊法・性感染症など）・医療制度など、大学生がどれくらい健康にかかわる知識（基本的医療関連知識となづける）について実態調査はなされていない。

２．研究の目的

本研究では、青年期の基本的医療関連知識評価尺度の開発および青年期の基本的医療知識とヘルスリテラシーの実態調査を行い、双方の関連性を検討する。

３．研究の方法

高校の「保健」教科の指導要綱で教わるべき項目から作成した 66 項目の質問に対し、大学

保健にかかわる医師 3 名、保健師 2 名が「大学生を含む青年が知っておくべき健康関連知識としてふさわしいかどうか」について、5 件法で回答し、不適切な項目を排した 49 項目の質問を抽出した。これらに対し本学学生を対象に Web アンケート調査(報酬 Amazon ギフトカード 500 円)を行った。同時にヘルスリテラシー尺度として知られる 47-item European Health Literacy Survey Questionnaire (HLS-EU-Q47)の日本語版の調査も行った。統計は SPSS24(IBM)を用いた。

４．研究成果

584 人の学生から回答を得た。年齢は 20.9±3.1 歳（平均±標準偏差)、性別は男性が 71%であった。課程としては、学士が 56%、修士が 33%、博士が 11%であった。学部の所属は、文系が 30.4%、医学部薬学部が 10.3%、その他の理系が 58.8%であった。

高校の「保健」教科の知識については、ワクチン・感染症・死因統計・少子化・避妊などの質問の正答率が低かった。一方喫煙・飲酒・薬物などについては、正答率が高かった。学習指導要綱のカテゴリーとは相関を認めなかった。理由としては高校生～大学生の日常に話題に上る事柄は理解が進み、話題に上りにくいことや正しくない議論がされやすいワクチンや避妊などについては誤った理解をしている可能性が考えられた。今回のアンケートで正答率が低い項目にフォーカスをあてて、大学生に情報発信することは有用と考えられた。

また、HLS-EU-Q47 日本語版においては。３領域とも「理解」の能力は大学生で高かった

が、特に疾病予防とヘルスプロモーションの領域で「入手」・「評価」・「活用」の能力が日本人成人より劣っていた。例えば「緊急時に救急車を呼ぶ」ことに43%が難しいと感じているというのは、非常時に命にかかわる問題であると考えられた。

本研究の限界としては、高校の「保健」教科の知識についてはそもそも問題の難易度が同程度かについての検討がされていないことが挙げられる。また、本学は比較的入学が困難とされる大学であり、日本全体の大学生を反映していない可能性もある。ヨーロッパとの比較についてはヨーロッパの調査が対面であったため他の日本の調査と比べ「難しい」と答えにくいバイアスがかかっている可能性がある。

本研究では大学生が有する健康に関する知識の現状と、ヘルスリテラシーの他世代との比較が行うことができた。今後の大学保健活動や高校の学習指導要綱策定において示唆に富む研究であると考えられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 春原光宏　柳元伸太郎
２．発表標題 Japanese education system on health and health-associated knowledge evaluation scale for adolescence-pilot study
３．学会等名 American College Health Association (ACHA) 2022 annual meeting（国際学会）
４．発表年 2022年

１．発表者名 春原 光宏，立石 晶子，江本 範子，柳元 伸太郎
２．発表標題 大学生の健康にかかわる知識の特徴
３．学会等名 第60回全国大学保健管理研究集会
４．発表年 2022年

１．発表者名 春原光宏、立石晶子、江本範子、柳元伸太郎
２．発表標題 大学生のヘルスリテラシーの特徴
３．学会等名 第2回日本ヘルスリテラシー学会
４．発表年 2022年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関